

コーパスに基づく日本語主観移動表現のフレーム意味論的分析:英語との比較から

小原 京子

慶應義塾大学

ohara@hc.cc.keio.ac.jp

1. はじめに

本論文では、コーパス・インターネット上のデータを題材に、日本語の主観移動表現(例: *国道は山地を走る*)の使用や分布に関する制約について、フレーム意味論の立場から分析する(Ohara 2006)。特に、移動動詞の意味分類と、場所を示す項の「限定指示的ゼロ表示」(definite null instantiation (DNI)、いわゆるゼロ代名詞)に着目し、英語の主観移動表現と比較する(cf. Ruppenhofer 2006)。

その結果、英語フレームネット上の意味フレームに基づく Ruppenhofer (2006)の考察と、Matsumoto (1996)・松本(1997)の主観移動表現に関する仮説は、日本語の主観移動表現の分布や用法を十分に説明できないことが明らかとなった。そこで、イメージスキーマに基づく新たな意味フレームと、主観移動表現に関する意味的制約の改訂版を提案する。

以下では、まず本研究の背景を紹介した後、本研究における調査目的・調査手法・調査結果について述べる。そして、移動動詞の意味分類と主観移動表現の意味的制約に関する新たな提案を行う。

2. 背景

2.1. 主観移動表現

以下の(1)、(2)では、主語で表されている物体の位置、範囲などが移動動詞を用いて表現されている。これらの文を範囲占有経路(Coverage Path)表現と言う。これらの表現は、主語で表された物体を認識する際に認識者の心に喚起される移動がもとになっていると言われており、このような移動を主観移動、虚構移動と呼ぶ。

- (1) a. そのハイウェイは東京から名古屋へ走っている。
b. その山脈は南北に走っている。
- (2) a. *The highway runs through the mountains.*
b. *The mountain range goes from Canada to Mexico.*

2.2. フレーム意味論

フレーム意味論とは、言語と経験の結びつきを中心にすえた、言葉の意味に関する理論的枠組みである。フレーム意味論では、各々の語彙項目の意味はそれが喚起する意味フレームとの関連で記述される。「意味フレーム」とは、「特定の状況、物体、出来事の型を、それらに現れる参加者や小道具とともに示した、スクリプトのような概念構造」を指す。フレーム意味論は、Fillmore が 1960 年代に提唱した格文

法を発展させた理論的枠組みとすることができるが、フレーム意味論における「意味フレーム」の概念は従来の格文法における「格フレーム」よりもずっと粒度が高く、認知的妥当性をもったものである。

2.3. 先行研究

Ruppenhofer (2006)は、移動動詞をその意味(英語フレームネット <http://framenet.icsi.berkeley.edu/>で定義された意味フレーム)に基づき、次のように分類した。

- 場所志向動詞: *arrive, leave, cross* (cf. 着く、去る、渡る)
- 経路形状動詞: *zigzag, meander* (cf. 曲がる)
- 自律移動動詞: *run* (cf. 走る)

その上で、英語の主観移動文では経路形状動詞と比べ場所志向動詞があまり用いられないことを指摘した。これは、British National Corpus (BNC)上の、

- 1) 移動動詞を含む文における主観移動用法の比率、
- 2) 主観移動文のうち主語が *The road* となるものの移動動詞の内訳、

に基づく。まず、1)に関しては、*arrive, leave, cross*などの場所志向動詞は、*zigzag, meander*などの経路形状動詞に比べ、主観移動用法で用いられることがまれであった。また、2)に関しても、BNC からのランダムサンプル 115 文のうち場所志向動詞が用いられていたのは16文のみであった。さらに、

- 3) 主観移動表現文において場所を示す項が「限定指示的ゼロ表示」であるか、

について Google の検索結果を調べたところ、場所志向動詞を含む英語主観移動文では場所を示す項がゼロ代名詞となるのはまれであることがわかった。

一方、Matsumoto (1996)は、日本語と英語の主観移動表現について、以下の二つの意味的制約を提案している。

- (I) 経路条件: 移動経路のなんらかの特徴が表現されなければならない。
- (II) 様態条件: 経路となんらかの相関関係がある場合にのみ移動の様態に関する特徴が表現される。

3. 分析

3.1. 調査目的

Ruppenhofer (2006)の英語の主観移動文に現れる移動動詞に関する考察が日本語にも当てはまる

か、Matsumoto (1996)の日英語の主観移動表現に関する制約が実際にコーパスやインターネット上の日本語用例にも当てはまるか、を調べる。

3.2. 調査方法

1') 移動動詞を含む文における主観移動用法の比率に関しては日本語フレームネット (<http://jfn.st.hc.keio.ac.jp/ja/index.html>) コーパスを、2') 主語が「**国道**」である主観移動文の移動動詞の分布と 3') 主観移動文における場所を示す項の「限定指示的ゼロ表示」の件数に関しては Google によるウェブサイトの検索結果を調査した。

3.3. 調査結果

まず、1') 移動動詞を含む文における主観移動用法の比率は、場所志向動詞、経路形状動詞、自律移動動詞間でほとんど差がないことがわかった。たとえば、場所志向動詞「**至る**」と「**通る**」の主観移動用法の比率がそれぞれ 4%と6%、経路形状動詞「**曲がる**」は 5%、自律移動動詞「**走る**」は 3.8%であった。

また、2') 主語が「**国道**」である主観移動文の移動動詞の分布を見ると、34%の動詞が「**通る**」などの場所志向動詞であり、「**曲がる**」などの経路形状動詞は 4%のみであることが明らかとなった。

さらに、3') 主観移動文における場所を示す項の「限定指示的ゼロ表示」の件数については、全体で 8.9%にとどまった。すなわち、場所志向動詞、経路形状動詞、自律移動動詞を問わず主観移動文においては場所を示す項の「限定指示的ゼロ表示」はまれである(場所を示す名詞句はあまり省略されない)ことがわかった。一般に日本語は「限定指示的ゼロ表示」が多い言語であるにもかかわらず、である。これらの結果は、いずれも 2.3. で紹介した Ruppenhofer (2006)による英語の分析結果と対照的である。

4. 考察

2.3.の Matsumoto の意味的制約(I)と(II)は、日本語の主観移動表現文において場所志向動詞がよく用いられることは説明できない。

そこで、Matsumoto の主観移動表現に関する意味的制約の改訂版を提案する。

- (I') 改訂経路条件:移動**経路の場所あるいは方向性**が表現されなければならない。
- (II') 改訂様態条件:**経路の形状**を表現する限りにおいて移動の**様態**の特徴が表現される。

まず、日本語の主観移動文において移動動詞の種類を問わず「限定指示的ゼロ表示」がまれであることについては、(I')で説明できる。

次に、日本語の主観移動文のうち場所志向動詞が使われる比率が高いのは、英語と比べ場所志向動詞に分類される移動動詞の種類が日本語に多いことによると考えられる。すなわち、日本語には様々な移動経路に関する動詞が存在し、日本語で「場所志向動詞」と分類されるものは、実際には移動経路

(Trajectory)と場所(Landmark)の多様な相対関係(イメージスキーマ)によって、さらに下位分類化される。したがって、日本語の主観移動文に用いられる移動動詞を詳細に分析するには、イメージスキーマに基づき移動に関する意味フレームを厳密に定義する必要がある。

図1は、日本語フレームネットコーパスと Google 検索結果における主観移動文に現れた移動動詞と、それらが喚起する意味フレームを図式化したものである。Go_through フレームを喚起する「**貫く**」、Go_along フレームを喚起する「**沿う**」の概念は、英語では場所志向動詞ではなく、*go through*, *go along* のように、「移動動詞+経路を表す前置詞または不変化詞(particle)」で表される。

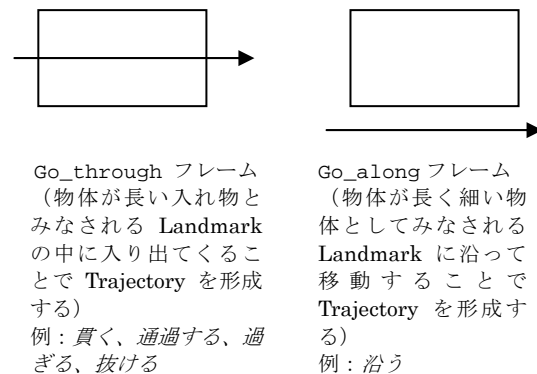


図1 Go_through フレームと Go_along フレーム

5. おわりに

本論文では、日本語の主観移動表現の使用や分布に関する制約について、フレーム意味論の立場から分析した。その結果、先行研究は日本語の主観移動表現の分布や用法を十分に説明できないことが明らかとなった。そこで、イメージスキーマに基づく新たな意味フレームと、主観移動表現に関する意味制約条件を提案した。本論文が、主観移動文研究と類型意味論の発展に寄与することを願う。

主要参考文献

- Matsumoto, Yo. (1996). "Subjective motion and English and Japanese verbs." *Cognitive Linguistics* Vol. 7, No. 2, 124-156.
- 松本曜. (1997). 「空間移動の言語表現とその拡張」. 田中茂範・松本曜著『空間と移動の表現』125-230. 研究社出版.
- Ohara, Kyoko Hirose. (2007). "A Corpus-based Account of Fictive Motion Sentences in Japanese FrameNet." Poster presented at the 10th International Pragmatics Conference (IPrA10). Gothenburg, Sweden. 12th July, 2007.
- Ruppenhofer, Josef. (2006). "Fictive Motion: Construction or Construal?" Paper read at the 32nd Annual Meeting of the *Berkeley Linguistics Society*.